

義豊勢は城攻めのため、槍を捨て弓に頼っていた。そのため、乱戦には不利な状況だった。槍のない鎧武者は太刀に持ち替えたが、これが役に立とう筈がない。

当時の騎乗武者の合戦は、槍の破壊力を用いることが主流だ。

太刀は甲冑を斬ることが出来ず、致命傷を与えることも適わない。そのため敗走の頼りになる程度の武器だ。介者剣法として組み合つてこそのものであり、馬上から仕掛ける類に非ず。

ゆえに太刀を用いるときは、敗走や血路を開くといった、よほどの状況なのである。

義堯側からの奇襲は、義豊勢の根底を覆すものであり、退けるものなら立て直すべき流れであった。が、その電撃的な攻めにより、それも許される状況ではない。義堯勢から槍を奪い、それを用いることこそ最良だが、それこそ容易ならざる仕儀といえる。それほどの戦さ場の劣勢を義豊は噛み締めていた。

風はますます逆巻いた。その風が熱をはらみ、犬掛の狭地に人馬がひしめいた。

平久里川は上流から鮮血が流れとなり、みるみると染め上がっていった。敵味方のものとも解らぬ骸も流れてきた。まだ息のある兵たちの呻き声は随所に響いたが、それ以上に猛り狂う怒号がそれらを覆い潰していった。

馬上の正木時茂は大鎌鎗を振るつた。徒歩きの義豊勢は、次々になぎ倒されていった。これに象徴されるように、天運は、明らかに義堯側に微笑んでいた。随所で義豊勢が討ち果たされていった。

合戦開始から半刻も経たぬ頃。

「退け、退け！」

そう叫ぶ大将首めがけて、義堯方の兵が殺到した。無数の槍襖に対し、一本の太刀など無手に等しかった。甲冑を刺し貫く槍に、その大将首は絶命した。

それこそ、里見義豊その人だった。

「御大将、討ち取られ候え」

義豊勢はその声に動揺した。逃げる者もいた

が、それらは次々と討ち果たされていった。

滝田城下の川又では義豊を盛り立ててきた御傍衆たちが大勢討たれた。こうして犬掛の合戦において、義堯は圧倒的な大勝を得たのである。

義豊が敗れると、それに夢を賭けた者たちの末路は悲惨だった。

義豊の正室は鳥山時貞の娘である。彼女はこの敗戦を知り、悲嘆の余り自害して果てた。のちに南条城下に五輪塔が建てられ葬られたという。中里備中入道の娘は側室だが、同じく自害を選択した。

義堯は北条という援軍のみならず、里見の同意者により多く支えられた。

犬掛の戦いは、その結果の勝利であった。

しかし、義堯は無邪気に喜ぶことをせず、将兵たちには勝ち鬨さえも禁じた。

庶流が嫡流を討つ。

このような事態を憂うのも、義堯の生真面目さゆえのことである。

論功行賞は戦さ目付により正確に報告され、公正な沙汰により行われた。

しかし、里見義堯はひとりの総大将としてそれを行ったのである。このとき彼はまだ、里見家当主を宣言していない。いや、そのことを嫌う素振りさえあった。

どんなに正当化しても、主家を討つのは大罪である。義堯の心はそのことに縛られていた。

「権七郎殿はもはや里見の当主。つまらぬ風聞の払拭は、我らに任せてくださりませ」

正木時茂は進んでこれらの風聞をよき方へ導くよう、腐心を重ねた。正当化する詭弁さえ吹聴し、近隣諸国へ根回しした。

父たちがそうしたように、息子の彼らも強い絆を深めていくのである。

戦さには勝者もいれば敗者もいる。

これが世の常である。

そして、敗れ去った者の末路は、いつの時代も悲惨であった。彼らはもはや、悪名高き一味として、領民から恨みを買っていた。

義豊の室たちは自害して果てたが、生き残った子たちは、安房上総を去っていった。義豊の子で生きながらえたのは、最初から義堯に荷担した、又太郎だけであった。

犬掛合戦は里見氏にとって新しい転換期の象徴であった。この戦いののち、里見義堯は暫く滝田城に腰を降ろして、哀れにも滅び去っていった者たちの鎮魂に尽くした。

「美殿は大きな男になれと申したが、儂は小さくともよい。しかし、どんな者にも心を配れる気持ちだけは忘れたくない」

そうせずにはいられぬほど、義堯という人間は純粹であった。ゆえに人は、義堯という人物に惹かれたのかも知れない。

鎮魂ののちは宮本城に留まり、借りを作った北条氏との外交に追われる日々を重ねていく。

この頃になって、在地豪族たちは義堯を里見家当主にと仰いだ。

いや、在地豪族という呼び方も旧い。

犬掛合戦の折、彼らは独立逃散を由とせず、臣下の如き純粹さで義堯に従った。それにより内乱を制し、恩賞を得たのだ。

義堯は心を強く持ち、当主としての自覚を育んだ。在地豪族たちはその家臣という立場を自ずと望み、このとき里見氏との主従関係が誕生しつつあった。

皮肉なものではないか。

あれほど義豊が望んだ、里見家の「一統」は、彼が敵役を演じることで、望まぬ形で義堯のもとに果たされてしまったのである。

いや、義豊の望んだものは、彼のみぞ知ることで、義堯のそれは《集権》の第一歩といえよう。

義堯は在地豪族に心を配り、彼らも若き主君を信頼した。まだまだ課題は山積しているが、

《一統》の為された里見氏は富国という第一歩を進むのである。

思えば義豊も不遇だった。

その思想が周囲の《時代》より早すぎたのだ。早すぎた故に、義豊は《時代》に捨てられ、次の《時代》の礎になったのかも知れない。

現に義堯は当初から《一統》の主ではなく、未知の領域を手探りで飛躍することとなっていた。その点でいえば、《一統》を思い描いていた義豊は愚者ではない。

敗者の歴史は勝者につくり変えられるのが世の常なのである。

十十十

犬掛へ（8）

夢酔 藤山